

おおくち まかみ

「大口の真神の原（明日香）」

・村史によると「真神」は偉大な神の意味。

また、恐ろしい狼の古名もマカミと言ったので、その連想（大口を開けて吠えている）から「真神の原」に「大口の」という枕詞がついたと言う。

・その枕詞から「昔、この飛鳥の地に、人を襲って食う老狼が居った。土民が恐れて大口の神と言い、その地を大口の真神の原と名付けた」（大和国風土記逸文）という伝説が生まれたくらいの荒涼とした原野であったと見られる。

・明日香の真神の原の地は現・明日香村飛鳥にある飛鳥寺

（安居院^{あんごいん}）から南方一帯の平野を指す呼称との説がある。

・万葉集にはこの明日香の真神の原を詠んだ次の歌がある。

大口の 真神の原に 降る雪は
いたくな降りそ 家もあらなくに

作者・舎人娘子^{とねりのおとめ} 卷八一―一六三六

（解説）・真神の原に降る雪は、ひどく降らないでおくれ。家もないのだから。

・この歌の作者・舎人娘子は伝未詳

・作者がどこかにでかけて行く途中、宿る家もない心細さとオカミが住もうという恐ろしい「真神の原」で雪に降られたが、これ以上にひどく降らないで欲しいと願って詠んだ歌であらうか

（参考文献）明日香村村史、県民だより奈良「はじめての万葉集」他

（写生地）真神の原に建つ飛鳥寺西口から原の南には手前に広がる田畑と南端にある聖徳太子の生誕地と伝えられる「橘寺」と周辺の村落が見えるが、その風景を描く。（池田杏花）

